
緋弾のアリア 鬼の子と緋弾

らい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア 鬼の子と緋弾

【Nコード】

N7720V

【作者名】

らい

【あらすじ】

鬼の血を半分持つ少年と、緋弾を持つ少女が出会うとき物語は始まる。主人公はチート（たぶん）ですのであしからず。

弾籠め（前書き）

どうも、はじめまして。これが処女作になります。

文才はおそろしいほどありませんが温かい目で見てやってください。

あしからず。

弾籠め

空から女の子が降つてくるとおもつか？

まあ常識ならあり得ないね…

もし降ってきたらそいつを歓迎してやろう

そう思うのはおかしいからだろうがまあいいんじゃないかな

どうせおれは普通じゃないからさ

ピンポーン

うん？誰だろうこんな朝早くから

ああ、そうかキンジの幼馴染の白雪か

朝早くからご苦労なことで

「おいキンジ起きろ、白雪さんまた来てるぞー」

起きる気配なし… 殴ってみるか

いやしかし白雪さんになに言われるかわからん

「起きないかーしかたない、出るか」

ーガチャ

「おはようキンちゃ…じゃなくてユウくん」

「おはよう白雪さん、キンジならまだ寝てる起こしてきてよ」

「うん！」

そう言って白雪さんは嬉しそうに部屋に아가って行った
そのあいだに俺は冷蔵庫にとってある大量のチョコレートを取りに
行き食べ始める
俺は甘党だから

「ユウくんもお菓子ばかりじゃなくてこれも食べて?」
そう言って白雪はすごい朝ごはんを出してきた
断るのもなんだか悪い気がしたので御相伴になることに

「キンジ幸せ者だな、こんなにかわいい幼馴染にお世話してもらっ
て」

「そんなキンちゃんのお嫁さんだなんて」
いや、いつてないからそんなこと一言も

なんだかんだで白雪は先に帰って行った

まだ時間があつたので俺たちはだらだらしていた
まさかこれからめちゃくちゃな事に巻き込まれるなんて知らずに

——俺たちは忘れてくても忘れられないだろう
なんてってバカな俺が空想していた歓迎すべき人が降ってきてしま
ったんだから

神埼・H・アリアがね

第一弾 歓迎すべき奴（前書き）

駄文ですが読んでくれるとうれしいです

第一弾 歓迎すべき奴

俺とキンジは58分のバスをだらだらしていたせいで逃してしまった
バスを逃してしまったせいで自転車登校をよぎなくされた
これが大きな間違いだとはきずかずに

「そのチャリには爆弾が仕掛けてありやがります」

うん？今何て言った？爆弾とかなんとか…

ああ分かったこれキンジの悪戯だろう

キンジもまだ子供だなー、こんなので俺が驚くわけないのに

「おい、キンジ悪戯には限度つてもんがあるんだぞ？これはやつち
やいけない悪戯だ」

「そんなことするか！後ろ見る後！」

キンジの言うことに従って後ろを振り向く

そこには銃口をこっちにに向けた奇妙な^{セクウェイ}かかしが俺たちを狙っていた

「いや、キンジ君こんなに手の込んだ悪戯はしないでいいよ？」

「命をかけた悪戯なんかするわけないだろ！」

「そ、そりゃそうだよな…俺は良くてもおまえは死んじゃうもんな」

「よし、キンジ第二グラウンドにむかうぞ」

爆弾走りながら解体なんてそんなスキルは持っていない
下手なことをしたら俺たちは撃たれる

なので人のいないところで爆発させるしかない
解決方法を必死に考えていたときおもしろいもの？を見つけてしま
った

「キンジ俺はおもしろいもの？を見つけてしまった」

「なんだよこんなんに！」

「あれ、みてみるよ」

そう言つて女子寮の屋上を指差す
そこにはピンクのツインテールをなびかせて女の子が立っている
しかもこつちをガン見している

「あの子なんか飛び降りそうなんだああ！おい！」

言い終わる前に女の子は飛び降りてしまう
そして彼女は準備してあったであろうパラグライダーを広げこつち
に飛んでくる

「バツ、バカ！来るな！この自転車には爆弾が——」

そんなこと言ってももう遅い女の子はこちらに飛んできてしまつて

いる

「なんかこっちに来ちゃったよ、助けてくれんのかな？」

「ほらそのバカ共！さつさと頭下げなさいよ！」

バリバリバリバリッ！

俺たちが頭を下げる前にセグウェイを破壊した
上手いよく当たるもんだ…

しかしスパッツぐらいはけよキンジくんは変態なんだから

飛んでいる女の子に助けをもとめる

「おい、こいつを助けたやつてくれるか？」

「まかせなさい！」

彼女がこっちを向いて返事をしてきた

ぎゃあぎゃあ騒ぎながらキンジと女の子が体育館のほうに吹っ飛んで行ってしまう

俺はこれからの解決方法を考えないと

爆弾をどうにかしないといけないな

キンジは女の子に助けてもらったけど

しかしさっきの子可愛いな

ちっちゃかったけど…小学生？

いや、俺はロリコンでは決していない、でも可愛かったなうん
しかしあの子は小学生、小学生は犯罪…

などとバカなことを考えていたせいで自転車が石につまずいて転んでしまった

投げ飛ばされた体をすぐに起こし自転車から距離をとる
体をかばうが間に合わない

ドガアアアアアアアアアアン！！

光の奔流

続いて爆風

それらはものすごい勢いで体を破壊しにかかる

「……いてえええ、人間だつたら今頃肉塊になつてんだろうな」
腕や脚はちゃんと付いていたがちよつと肉とかがこぼれている
まあ少ししたら治るけど、いたいな

ところでキンジたちは大丈夫かな
治るまでちよつと休憩しよう

「ヘンタイ——！」

声が聞こえた女の子の声だ。

今変態つて言つたか……？

なに！変態がいるだと！？それはいかんおまわりさんを召喚しなくては

声のするほうに行くと変態一号とその変態を助けた女の子が跳び箱
にはまつてた

しかも女の子のほうブラウス脱げかけで

「おお、わが友よおまえは犯罪者になつてしまつたか、俺は誠に悲
しい」

「誰が犯罪者か！」

「そうよこいつが私を脱がそうとし……キャー！なんであんたは裸なのよ！」

「は？」

女の子が俺から視線をそらす

なるほど爆弾のせいで制服がダメになっっていたらしい

いや！下は何とか大丈夫だったよ！？誤解しないでください

「おお…これじゃ性犯罪者のことをいえないな」

「誰が性犯罪者だ！！」

ガガガガガガガン！

突然の轟音が、体育館倉庫を襲った

俺は警戒をしていなかったため背中をもちに撃たれてしまった

「うぐああ……っ！」

「ちょっとあんた大丈夫！？」

「おい優大丈夫なのか！？」

「気にすんな、いいから早く隠れろ！」

キンジたちを跳び箱の中に押し込んで銃撃されない位置に飛ぶ

銃弾をなんとかしないと

女の子がセグを追い払っている間に背中にあつた銃弾をほじくりだしていく

これがまた痛い

ちよつとグロイ作業が終わつたと同時にキンジが女の子を抱っこしてやってくる

「キンジ、なにヒスつてんだよ。きしよいぞ」

「姫はそのお席でごゆつくり。銃なんかを振り回すのは、俺たちだけではないだろう?」

「あ……アンタ……どうしたのよ!? おかしくなっちゃったの!？」

赤面して混乱しているようだ

センサーキンジ君がきしよいです 大事なことなので二回言いました

おんなのこが思い出したかのように俺に話しかけてきた

「アンタ背中大丈夫なの!? 見せなさい!」

「うん? なんのこと?」

「さっき撃たれてたじゃない! ほら早く! え!? 傷が……ない!？」

「まあそついうわけだ気にすんな」

女の子が何か言いてそんな顔をしているのを無視して
性犯罪者ことキンジに話しかける

「変態一号右のかかし4機頼める？」

「それじゃあ左の3機は頼んだよ裸王様」

なん不名誉な称号をいただいてしまった

ズガガガガガンツ！

UZIがまた発砲してきた

撃ってきた弾は全てサバイバルナイフでたたき切る
集中すれば銃弾なんて止まって見える

.....

俺は人じゃないから……

人間で銃弾が見ることができるキンジとかは正直俺よりもすごいと
思ってる

後はUZIに接近し一つずつ切り刻んでいく
約一センチ幅の正方形に

3機全てを切り刻んだ後

キンジと女の子のもとに戻る

「なあキンジ制服貸し手くれない？このままだとかまっちゃうかも」

「仕方ない貸してやるよ、あとアリアこれ使え」

キンジは女の子にベルトを貸していた
なにに使うか知らないけど

そんなことより早く帰って着替えてこないと
キンジと女の子を残し寮に帰るのだった

第一弾 歓迎すべき奴（後書き）

誤字脱字があると思いますが
見つけたらよろしくお願いします

主人公設定（前書き）

まだ完全に固まりきってないので設定変えるかもしれないです
その時はよろしくお願いします

主人公設定

主人公設定

名前； 鬼切 優輝

年齢； 16

誕生日； 2月13日

身長； 160

顔； 上の中行くか行かないくらい

髪； 完全なる白髪 腰までかかる長さ 銀髪ではない

瞳の色； とび色

武器；

H & a m p ; K U S P

バタフライナイフ×3

サバイバルナイフ

スタンガン×2

科目：強襲科 Aランク

その他

父親が鬼 母親のほうは人間

不死身

回復力が異常なほどあり傷はしばらくすると治る

また腕や脚は時間をおけば生えてくる

人間を越す運動神経を持つ

自分が鬼と人間の混血種のため人に対して引け目を感じることがある
基本的には明るく振舞っている

第二弾 三人の関係

急いで寮に戻って制服に着替えて戻ったが結局始業式には間に合わず教室に入ったのはHRが始まるぎりぎりだった

席はキンジの隣の武藤の横だった

「先生、私あいつと白髪の間になりたい」

「な、なんでだよ……！」

「うん？いいぞ。てわけだ武藤お前の机は後ろにあるロッカーに決定だ」

「ロッカーはひど」なにいつてんだ！」「い……」

「いいじゃないか。どうせなら隣はかわいい女の子の方がいいだろ？それにおまえ助けてもらったじゃないか」

「よくない！だいたいおまえは「て訳だから、いいよー！」「……」

「キンジ、さっきのベルト」

「ああそうだキンジ、あとブレザー」
キンジに借りていたブレザーを返す

「それと優輝カバン」

「ああ、ありがとう」

あの爆発のなか平気だったのか
おしゃかになつてると思つたのに

このやりとりを見ていたふりふりの改造制服の理子が騒ぎ出す

「理子分かつた！分かつちやつた！三人の関係が！」

「キー君ベルトしてない！そしてそのベルトをツインテールさんが
持つてた。さらにニツキーがブレザーを持つてる。これ謎でしょ謎
でしょ！？でも理子には推理できちやつた！」

ニツキーってのは俺のあだ名だ

名前の鬼と優を切つてはつたものだ

「キー君は彼女の前でベルトをとるような何らかの行為をした！そ
して彼女の部屋にベルトを忘れてきた！ニツキーはキー君の匂いを
嗅ごうとしてブレザーを持つてた！つまり三人は歪な恋愛中なのだ
よー！ー！」

なぜそんな推理しかできない！

頭の中にマシユマロでもはいつてんのか！

「キンジがこんなかわいい子といつの間になんて!?」

「優輝君が匂いフェチの変態だったなんて!」

「ネクラだと思ってたのに!」

「優輝俺のでよかったら匂いを嗅いでくれ!」

「ふけつ!」

「ふざけるな!俺は男の臭いなんて嗅ぎたくない!女子の方がいいに決まってるだろ!」

……ハッ!

何口走ってんだ!?俺!!

「本当に匂いフェチだったなんて!?」

「俺の匂いを嗅げ!」

「お前はだまれ!」

「いやあの、だから……」

「おまえらなあ……」

ズギュンズギュン!!!

二発の銃声がクラスを一気に凍りつかせた
音の発生源は真っ赤になって震えているアリアだ

「れ、恋愛なんてくだらない！」

「全員覚えておきなさい！そんなバカなこと言う奴には……風穴あけるわよ！」

第三弾 まさかまさかの奴隷宣言

昼休みになると同時にむらがつてきたクラスメートから逃げるため
屋上に避難した
キンジも一緒だ

「なあこれから神崎の対策を考えよう」

「いいよ別に退屈しなさそうだもん」

「だめだ、あいつがいるだけで地獄が始まるんだぞ！！」

「まあキンジにとってはね」

キンジとこれからについて相談を始めようとしたところに
強襲科の女子がやってきた

「キンジ隠れる」

そういつて物陰に隠れる

何で隠れたんだろ？自分でも不思議に思う

しかし女子にはバレなかったようだ

「ねえねえ、さっきの周知メールさキンジと優輝じゃない？」

「あ。あたしもそれ思った」

「キンジたちも不幸だよね、爆発されて次はアリア？」

「キンジたちカワイソーだよー」

「アリア二人のこと探ってるらしいよ、二人のこと聞かれたもん」

「あたしも聞かれた。キンジと優輝ってどんな武偵なのかとか、てきとーに答えておいたけど」

「いきなり二股とか引くわー」

「アリアって空気読めないよね、友達いないし」

「お昼も一人お弁当で食べてたよ。教室の隅っこでぽーんって」

「うわっ、キモおー。いなくなればいいのに」

女子の話を聞いからやりきれない感じになってしまった
嫌な気分だ

「なあ、キンジ……………」

「なんだ？」

「人間って嫌な生き物だな……………」

「?そうかもしれないな」

夕方学校が終わるとすぐにキンジは帰ってしまったようだ
アリアに会いたくないのだろう
そんな俺はアリアに会いたかったのだがどこにもいない
しかたないので寮に帰ることにした

寮につくと何だか黄昏ているキンジがいた
今日のことも考えているのだろうか
今日は色々あったからな
バスジャックとかアリアとか

「なあキンジ、アリアに会ってないか？」

「いや、会ってない。なんでそんなこときくんのだ？」

ピンポン

「ちょっと聞きたいことがあるんだ」

ピンポンピンポン

「俺にあいつの話をするな、いいな」

ピポピポピポピポピポピポーン！ピポピポピポーン！

おいおい誰だよ

何かチャイムが一つに重なって聞こえるぞ

すごい連打力だなピンポンダッシュの名人と見た

「誰だよ！」

音に耐えかねたキンジは渋々ドアを開ける

「遅い！あたしがチャイムを押したら5秒以内に出ること！！」

「か、神崎！？」

「アリアでいいわよ」

「お、おい」

止めようとするが小さな体で簡単にかわされる
そしてトイレを見つけ入って行ってしまった

「誰だった？」

「アリアだ……」

トランクを運び入れながら答える

その顔は焦げたトーストを食べたような顔だ
かわいそうに…

アリアがトイレから出てきた

「ねえ、あんたたち……」

夕日をバックにアリアが振り向く
嫌な予感がする

「あんた達、あたしの奴隷にないなさい！」
マジっすか

第三弾 まさかまさかの奴隷宣言（後書き）

誤字脱字あつたらしくお願いします

あとアドバイスなんかもおねがいします

第四弾 宣戦布告（前書き）

どうもお久しぶりです
かなり遅くなりました
読んでくれる人がいたらうれしいな（泣

第四弾 宣戦布告

「あんだ達、あたしの奴隷になりなさい！」
マジッすか……

いきなりなんてこと言ってんでしょねーこのちびっこ
てか、ちびっこのくせに奴隷とか……
俺にはそんな性癖ないのに、まいった

「ほら！さつさと飲み物ぐらい出しなさいよ！無礼なヤツね！」
無礼はおまえのほうだ。いきなりビックリだよまったく
何気なく視線を下に逸らすとそこには……
おお！ふとももが！……じゃなくて拳銃が覗いてるぞ！

「コーヒーエスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！砂糖はカンナ！一分
以内！」

「キンジ頼んでいいか？」
そう言ってキンジにコーヒーを用意させる
そして俺はアリアに質問を

「なあ、アリア聞きたいことがあるんだけど」

「なによ？」

「……いや、やっぱりいいや」

「はつきりしないわね」

やはり聞かないことにした

こいつが知ってるわけがないと思うから

しばらくするとキンジがコーヒーを持ってくる
そのコーヒーをアリアの前に置く

「？」

コーヒーの淹れられたカップを鼻に近づけて、ふんふんとする

「これ、ほんとにコーヒー？」

「これしかないんだから有り難く飲めよ」

「変な味、ギリシャコーヒーに似ているけどちょっと違う」

コーヒーって違いが分からない

あまりコーヒーなんて飲まないからな

ー
苦いから

「今朝助けてくれたことには感謝してる。それにその……おまえを怒らすような事を言ってしまったことは謝る。でもだからってなんでここに押しかけてくる」

「わかんないの？」

「わかるかよ」

「それじゃあ、優輝は？」

「ああ、わかってるぞつまりはアリアは変態ってことだ」

「なんであたしが変態なのよ！！」

憤慨しながらこちらに向かってフルオートで弾を撃ちだす
いきなりのことだったのになにもできずに全弾命中

「私が変態な訳ないでしょ！」

「なにいきなり発砲してんだ！痛いだろ！」

「あんた変態って言うからでしょ！まあいいわそのうち思い当たる
だろうから」

何かもう、アリアがさっ気たっぷりなのはわかった
でも発砲は止めてほしいかな、地味に痛い

「ねえ、おなかすいた」

いきなり話題がかわったぞ
こいつ反省してないな絶対！

でもそのしなだれがかかる仕草はちょっとかわいい

キンジクンを見ると

……顔を染めてました

男が顔を赤く染めても気持ち悪いだけだ

「何か食べ物ないの？」

「ねーよ」

「お菓子だけならあるけど」

「ちゃんとした食べ物は？」

「ない」

「ないわけないでしょ。何食べてるのよあんなたち」

「俺はコンビニにで買ってる」

「俺の主食はチョコレート、おかずにカロリーメイト、デザートはチョコレートだ」

「あんたの食生活おかしすぎるわ。死ぬわよ？」

「何が？ちなみにカロリーメイトもチョコ味だ」

「ギャグじゃないのね。まあいいわ早く行きましょ」
呆れた顔でこちらを見てくる

食生活について言われたのは今日で二回目だ

そんなにおかしいかな？チョコおいしいじゃん

そんなこんなで俺たちはお世話になっているコンビニに貢献しにいく
キンジはハンバーグ弁当、アリアはももまんをあるだけ買い占めて
きた

俺の事言えないじゃん、と思いつつかごにお菓子をぶちこみまっく
っている

俺らはテーブルに買ってきたものを広げる
そのほとんどがお菓子だ

「……ていうかな、奴隷って何なんだよ。どういう意味だ」

「あたしのパーティーに入りなさいってことよ。一緒に武偵活動するの」

「何言ってるんだ。俺はアサルトがイヤで、インケスタに転科したんだぞ。この学校から一般の高校に転校しようと思ってる。あんな
トチ狂った所に戻るなんて——ムリだ」

「あたしにはキラいな言葉が3つあるわ」

「聞けよ人の話を」

「『ムリ』『疲れた』『面倒くさい』この3つは人間の持つ可能性を自ら押し留める良くない言葉。あたしの前で二度といわないこと。いいわね？」

「あんたたちは……そうねあたしと同じフロントがいいわ。特に優輝なんかは一番いいポジションなんじゃないかしら」

フロントは傷率がダントツで高い

アリアは朝の傷が治るのを見て適任だと言っているのだ

「よくない！そもそもなんで俺と優輝なんだ？ほかにもいるんじゃないのか？」

「太陽はなんで昇る？月はなぜ輝く？」

アリアは人の話を聞くことはできないのな？

話がいきなり飛ぶし

「キンジは質問ばかりの子供みたい。仮にも武偵なら、自分で情報を集めて推理しなさいよね」

確かにその言葉は正論だ

しかしアリアとは会話のキャッチボールが続かない自分の要求が一番らしい

そんなのでは友達を作るのは大変だろうに

「とにかく帰ってくれ。お前とは会話が成り立たない」

「まあ、そのうちね」

「そのうちっていつだよ」

「あんた達がパーティーに入るまでよ」

「もう夜だぞ？」

「なにがなんでも入ってもらうわ。私には時間がないの。うんと言わないなら——」

「うんと言わないなら、なに？」

「いわないなら、泊っていくから」

「うん？どこに？」

「近くに宿なんてあったかな？」

「キンジに話を聞こうとすると、キンジの顔が痙攣を起こしたような顔になる」

「ああ、笑顔の練習中ですか」

「仕方ないのでアリアに聞くことにした」

「ねえアリアこちら辺に宿なんかあったかな」

「何言ってるのここに泊って行くのよ！」

「ここは宿じゃないぞ？泊まるならほかに……」

「うるさい！泊ってくつたら泊ってく！長期戦になるのは想定済みよ！」

「トランクをビシッと指さす」

「アリアはここに泊ってくつものりなのか」

じゃあの中身はお泊りセットってことで…

しかしここは男子寮。見つかりでもしたら大変なことに！

「——出てけ！」

はっ？

「なんで出てかなきゃいけないんだよ！ここはおまえの部屋じゃない！」

「分らず屋にはお仕置きよ！外で頭冷やしてきなさい！しばらく戻ってくるな！」

猫っばい犬齒をむきながら威嚇してくる
キンジほうりだされるなんてお気の毒に

「あんたも出てきなさいよ！」

「なんで？」

「なんでって、あんた達がパーティーに入らないからでしょ！」

「もうちょつと言いつてもんがあるだろ」

「あたしには時間がないのよ！」

「……アリア、さっき奴隷とか言ってたな。残念だが俺より弱いあなたの奴隷になるつもりはない」

「な、あたしがあんたより弱いですって！？Aランクのくせに！」

「ランクなんか人がつけた基準だ。絶対じゃない。もし奴隷にした

「いんだったら……俺を服従させてみるよ」

「わかったわ。あたしを弱いつて言ったことを撤回させて奴隷にしてやるんだから！」

「やれるもんならね」

「そう言つて俺は夜に繰り出す
といつてもコンビニだけだな」

第五弾 俺の幸せてこんなものだったのか？

アリアに宣戦布告してきた俺はコンビニに行ったキンジの横に並ぶ

「優輝おまえ遅かったな」

「ああ、ちよつとアリアに宣戦布告してきた」

「はあ！？何やってんだおまえ！なんで？」

「俺は俺より弱い奴の奴隷にはならないって言ってきた」

「命知らずだなほんと」

命知らずか。確かに命知らずに違いはないがちよつと違うかもしれない

なんてつて俺は死……ないから

頭をふき飛ばされたつて心臓を潰されても死んだことはない
なぜ死なないのかは自分でもわからないけど
まったく謎だらけだよこの体は

「アリア怒ってたな。俺を服従させるつて」

「じゃあ今帰るとやばいな。もうちよつとしてから行くか」

コンビニを出て時間をつぶすために談笑に花を咲かせる
ふと時間をみると部屋を出てきてから数十分ほどたっている

「ねえ、そろそろ帰らないか？」

「そうだなそうしよう」

部屋に到着したがアリアがいない
もしかしたら帰ってしまったのかな
若干さびしい。訳がない、いやそんなことないのか？いやいや……
よくわからない気分だ
手を洗おうかと洗面所にむかうと――

チャポン

風呂場から音がした

見ると曇りガラスの向こうには小さなシルエットが
しかもそのシルエットは鼻歌まで歌っている
まさか！

さらに洗濯かごの中にアリアの制服と日本刀と拳銃がこんなにちはし
ていた

やばい！ここは危険だ！キンジに知らせなくては！

「キ……」

……ピンポン……

バッドタイミング！

この慎ましいチャイムの押し方は！

白雪さんだ……

「キンジこれはやばい居留守を使うぞ！」

「そうす……うわ！」

あせりにあせったキンジはふらついて倒れこむ

「キ……キンちゃんどうかしたの？大丈夫？」

もう駄目だ。きらめたキンジはドアを開く

そこには袴に白子袖——巫女装束の白雪さんが立っていた

「な、なんだよお前。そんなかつこで」

「あつ……これ、キンちゃんにお夕飯すぐに届けたかったから着替え
ないできちゃったんだけど……イ、イヤだったら着替えてくるよ」

「いや別にいいから」

授業ってS研のことかな？

白雪さんは優等生だからな

「ねえキンちゃん。朝の周知メールのって……もしかしてキンちゃんのこと？」

「あ、ああ。俺と優輝だよ」

なぜか俺は含まれてなかった

「だ、大丈夫？怪我とかなかった？手当てさせて！」

「俺は大丈夫だから。触んなっ」

「は、はい。でもよかったあ、無事で。それにしても許せない、キンちゃんを狙うなんて！私ぜったい犯人を見つけ出して八つ裂きにしてコンクリ……じゃない、逮捕するよ！」

やばいキンジのためならこの人コンクリやりかねん
怖いこの人怖いよ！やっぱり苦手だな……

「い、いいからっ。ここではドンパチなんて日常茶飯事だろ。この話はこれで終了！」

「は、はい。えっと……はい」

ほんと、キンジ言われると素直に従うよね

そのキンジのためなら何でもしますってのがある意味怖い

「……でも……今夜のキンちゃん、何か……ちょっと変だよ？」

「そんなことないぞ！」

「なんか、いつもより冷たいような」

「ちょ、ちよつとトイレに行きたいんだ！用事は何だ？」

「はわわわ！ご、ごめんなさい。え、えつと筍ごはん作ってきたの。……明日から恐山の合宿でしばらく作ってあげられないから……」

早く帰ってくれ！頼むよお願いします！

ここにアリアがいるなんてばれたら、戦場になりかねないんだから！

「い、一日に二食も作っちゃうなんて、な、なんか私、お嫁さんみたいだね……って。何言ってるんだろうね私。あは、あはは。ヘンだね。うん、ヘン！……キンちゃんど……どう思う？」

「分かった分かったから！分かりましたからお引き取りください白雪さん！」

「『分かった』ってそれってつまり、キンちゃん……私……。お、お嫁さん」

お嫁さんって。会話がかみあってない

—— ちゃぱあ

まずい風呂場から水音が！

「？中に誰がいるの？」

「優輝だ！優輝が風呂に入ってたんだ！」

おいしい！俺はお前の隣にいるんだぞ！

そんな嘘が通じるか！テンパリすぎだ、落ち着け！

「そうなんだ、優輝君が……ってあれ？優輝君隣にいるよ？」

なに？もしかして今まで俺が見えてなかったのか！？
キンジしか映らないって、俺はモブキャラかよ……

「……ねえキンちゃん、何か隠してることない？」

「「ないない！」」

「そう。よかった」

そついうとようやく背を向けて帰ってくれた

一つ目の問題がようやくかたずいた

だが問題はもう一つのほうだ

もし帰ってきたのがばれでもしたら間違いなく撃たれる
ならば武器を奪って無力化すればいい

「キンジ風呂場に行ってアリアの武器を奪うぞ！」

「分かった！行くぞ！」

風呂場に直行し買い物かごの中に手を突っ込むと

がらがら

風呂場のドアをアリア様がお開きなさりました

沈黙

見つめあう瞳

ふわっと香るいい匂い

ツインテールをほどいた全裸のアリア
そうそれはまるで……

「もちぺったん！」

「へ、変態！」

「ち……ちがッ……！」

キンジが弁解しようと刀を持ち上げるがそこにはアリアの下着が引っ掛かっているだけだった

キンジはがくがく震えている

そして俺はというとこのまま死んでもいいかなーなんて思っていた、

「死ねええ！！！」

キンジにアリアの強烈な前蹴りが炸裂している
キンジがやられた、じゃあ次は俺か
どんなやられ方するんだろっ……痛くなければいいなあ

「つぎはあんたよ!!」

アリアはその小さな足で顎を蹴りあげてくる

脳が揺れてくらくらする。さらにトドメだと言わんばかりに顔面にとび蹴りをかます

ついに我慢できずそのまま気絶する

もし神様がいるんだったらこう言いたい。なんかいろいろありがとう

第五弾 俺の幸せてこんなものだったのか？（後書き）

なんか主人公が変態化してます

こんなはずじゃなかったのに……

誤字、脱字、感想あったらよろしくお願いします

第六弾 戦闘開始見物者は多し（前書き）

お久しぶりです

今回は初めての戦闘シーンです

がんばってかきました。よろしくお願いします

第六弾 戦闘開始見物者は多し

「バカキンジ！ヘンタイ起きる！」

腹にいきなりのパンチ続けざまにビンタの応酬

ただ起こすというだけではなく怒りが少し籠っている

なぜかというなら昨日の夜気絶した後ただちに意識を取り戻してしまっただけで

またアリアの裸を見てしまったからだ

もちろんぼこぼこにされた

と回想を挟んでいると次はキンジを起こしに行ってしまった

「朝ごはん出さないよ！」

「し……る……か！」

「おなかすくじゃない！」

「すかせこのバカ！」

「なんだはらへってるのか、じゃあ口あけな」

「な、なにする気よ！？」

「これをたべなさい。おいしいぞ?」

そう言つて冷蔵庫から生クリームをとり出す

実は昨日ぼこぼこにされた後こんなこともあるのかと作つておいたものだ

「なんで生クリームなんて食べなきゃいけないのよ!」

な、なんだと!? せっかくつくつたのに……

打ちひしがる俺をよそにアリアたちは出て行つてしまった

生クリームは……仕方ないので食べながら学校に向かうことにする

俺とアリアは今蘭豹に決闘の許可をもらっている

人間バンカーバスターと名高い蘭豹のことだ面白がつて許可を出すだろう

「決闘がしたいだあ?じゃあさつさと準備しろ!」

案の定簡単に許可が出た

「今から五分後にグラウンドに出てこい!遅れるんじゃねぞ!」

そう言い残し蘭豹は去っていく

「アリア逃げるなら今のうちだ。今なら蘭豹だけですむぞ?」

「誰が逃げるもんですか。あんたこそ」

「おい！糞ガキどもお！今からグラウンドでSランク神崎・H・アリアとAランク鬼切優輝の決闘が始まるぞ！見たい奴はさっさと来やがれえ！」

スピーカーから怒鳴るような蘭豹の声
全校に放送したのかよ！

「もう逃げることはできないわよ優輝」

「上等ださっさと行くぞ。観客が待ってる」

まずいことになった。

できるだけ見ている人がいないほうがよかったのだが
もし頭を撃ち抜かれて生きていたらみんなどう思うだろう？
ありえない。気持ち悪い。化け物。絶対に気味悪がられる
気を抜けない。捨て身の強襲はできなくなってしまった

グラウンドに到着するとまだ時間が経っていないのに結構な数の人があつまっている
俺たちが進むと周りに人が群がってきておしくらまんじゅう状態だ。
動けない……

「優輝君がんばってー」

「優輝勝ってこいよ！」

「アリア様ががんばってきてくださいー！」

「死ね」

今死ねって言った奴誰だ！？

自分を見るさまざまな感情の入り混じった視線

中には俺に対して怨恨の視線まで感じる

多分アリアファンクラブの人たちだろう。さっき死ねって言ったのも。

しばらくは襲撃される可能性がありそうだ

「なあアリア、奴隷の件とはほかに何か賭けないか？」

「いいわね。なににするの？」

「負けたほうが勝ったほうの言うことを何でも一回きくつてのはどうだ？」

「乗ったわその賭け」

おいおい……

アリアは絶対に勝つと信じているからこの賭けに乗ったのだろうな
女の子が何でも聞くなんて言っちゃいけないだろ……

「始めやがれ！糞ガキども！」

蘭豹が開始の合図を上げる

作戦はこうだ

攻撃できないようにしてから一気に終わらせる。実にシンプル
俺たちは遠距離から円を描くように撃ちあう

アリアの肩を弾丸が2発直撃するがほかはまったくあたらずに飛んでいく

早くも全ての弾を撃ち終わってしまった俺はマガジンを変えようとするがマガジンがない

おかしい。ちゃんと用意したのに……

仕方ないのでサバイバルナイフとバタフライナイフを出そうとする
がそれもない
なぜない！？

「くそっ！」

こうなったら接近戦しかない
なら一発で決めてやる！

地面が爆ぜ

常人では決して出ない速度でアリアの撃つ銃弾を潜り抜ける

「は、速！」

アリアの目が驚愕に見開かれる

そしてものすごく加減してのドロップキック

しかしこれが決まれば間違いなく試合が終わるぐらいの威力だ

「きゃあっ！」

アリアはよけきれないと判断したのかガバメントを使い受け流そうとする

だが完全には受け流せず後ろに倒れてしまう

かなりの距離を滑った俺は起き上がりアリアに近づこうとするが、アリアはすぐに跳ね起きる

「いたた。あんた、なんであんなに速いのよ！」

「さあな。こっちは武器がないんだよ！」

言うが早いかアリアにもう一度しかけに行こうとするが足を撃たれつい足を止めてしまう

さっきのを警戒しているのだろう近づかせない気だ

「近づかせない気かよ……だったらこっちにも考えがあるぜ」

指の間爪でざっくり切り血を流す

その腕をアリアに向かってつきつけ左手を添える
それはまるで拳銃をむけるように

「血弾」

指で切ったところの血を圧縮し高速で撃ちだす

撃ちだされた血は吸い込まれるようにアリアの顔にむかい着弾しアリアをのけぞらせる

いまアリアの顔は俺の血で染まっている

しばらくは目が見えないだろう

今のうちに終わらせる！

そしていつきに走り出す

「ごめん。おやすみなさい、アリア」

顎に掌底を繰り出す

それは脳を揺らし脳震盪を起こす

倒れてきてしまったアリアを抱きとめて背中にせおい蘭豹に声をかける

「蘭豹先生それじゃあ帰りますね」

「お、おい！ちょっとまって！」

蘭豹が止めるがそれを無視して寮に向かう
早くこの場所から離れたい。

あんな技使っ予定じゃなかったのに
失敗した。あの時ちよっとキレてたからな

そんなことより早く寮に向かわないと

「待ってください!」

「……………」

「ま、待ってくださいってば!」

「……………」

「まっってくださいよお……………」

うん?なんかいるぞ?

「きみは?」

「アリア先輩の戦姉妹です!」

今度は戦姉妹とききましたか
早くかえりたいな

第六弾 戦闘開始見物者は多し（後書き）

いやーやつは難しいですね
感想など待ってまーす

第七弾 やっぱそういう性癖なんですね（前書き）

一週間ぶりですね

読んでくれる方々ありがとうございます

第七弾 やっぱそういう性癖なんですね

「アリア先輩の戦姉妹です！」

今度は戦姉妹とききましたか

早く帰りたいな

「俺は鬼切 優輝。名前は？」

話をしても足は動き続ける

「間宮 あかりです」

「それじゃあアカリ。何の用かな？」

「アリア先輩を返してもらいに来ました！」

「アリアはこのまま寮に運ぶけど……」

「ダメです！知ってるんですからね私」

「なにを？」

まさか鬼つてのがばれたのか！？

あれは完全に消してもらったはずなんだが……

冷静を装っているが内心冷や汗だらだら

「先輩は匂いフェチで、女の子だけでなく男の子の匂いも好きな変態だってこと！さらにアリア先輩を部屋に連れ込んでるってことも

！
」

はい？俺が鬼つてしってるわけじゃないのか
よかったー安心だ。

じゃなくて！なにそれ！いつの間にそんな噂が広まってるのぉ！
つれこんでねーし！匂いフェチじゃないし！たぶん……

「誤解だ！完全なる誤解だ！詳しく話してやるからとにかく部屋に
来い！」

「イヤです！アリア先輩だけでなく私も連れ込もうとするんですか
！」

ああもう！らちが明かない

あ、そうだ、このまま無視して寮に行けばなんだかんだでアカリも
付いてくるんじゃないのか？

「わかった。俺は寮に先に言ってるぞ」

わざと話を打ち切ってアリアを揺らさないように走って寮にむかう

「ちょっと話聞いてたんですか！？ま、まっってくださいよ！」

なにか叫んでいたがあえてスルーする

寮につくとまずはアリアをソファに寝かせ
濡れたタオルを持ってきて血まみれになったアリアの顔をそつと拭
いてやる

「悪かったなこんなに血まみれにしちゃって」

起きてはいないが謝罪する

苦肉の策だったとしてもあんなところで披露するものじゃなかった
手の傷はもう完全になくなっている

しばらくは手に包帯でもまいてごまかそうかな

ある程度血は落ちたので新しいタオルで頭部を冷やしてやる
タオルをすぎに流しに向かうが

バガン！

ドアが乱暴に開け放たれる音と軽い足音が聞こえる
息を切らしながらアカリが転がり込んでくる

「アリア先輩は！？」

「そこに寝かせている。あ、ゆすったりするなよ」

心配そうにアリアに近づくアカリ
そろそろ起きるはずなんだけど
起きなかつたらやばいな救護科を呼ぶか……

「……う…うつん」

「アリア先輩！」

「大丈夫か？俺の名前が分かるか？この子はとうだ？」

アリアはしばらくぼーっとしていたが

「大丈夫よ。この子はアカリ。そしてこっちは優輝」

「さっきまでのことは覚えてるか？」

「あなたと戦ってたわ」

「頭痛は？」

「ないわよ」

ならよかった

重い症状にはなっていないようだ

「どこどこ」

「寮だ。あまり動かさないほうがよかったけどあそこには人がいっぱいいたから運んできた」

「運んできた……ってことはあたし負けたのね……」

「そうだな。あ、アカリちょっとアリアと話があるからはずしても
られないか？」

「分かりました。でも絶対へんなことしないでくださいよ」

信用できないという目でことらを見てからへやを出て行った
そんなことしねーよ
後で誤解を解いてもらわないと

「さてアリア。試合の始まる前の約束覚えているか？」

「ま、負けたほうが勝ったほうの言うことをな、な、何でも一回き
くつてのよね」

アカリが言ったこともあるのだろう顔を真っ赤にしてつぶやいた
別にへんなことなんてしないのに

「ああ。聞きたいことがある」

それを聞くと安心したようにふう、と息をはきだす
ほんつと信用ないな俺。泣きそうだよ……

「なぜそんなにドレイをほしがっているのかその理由を聞きたい」

「ねえ、私の名前は？」

「神崎・H・アリア」

「私のミドルネームわかる？」

首を横に振る

「私のミドルネームはホームズよ」

ホームズ？どつかで聞いたことがあるような……
まさか……！

「そう、私はシャーロック・ホームズ4世。だからパートナーが必要なのよ」

「なるほど。ワトソン探しか」

「でも実力が違いすぎて私に付いてこれる人はいなかった。でもあんた達なら私と一緒にやってけるはずなの」

アリアを退けたキンジ。アリアを倒した俺
俺たちに白羽の矢がたったわけだ

「でもそれだけじゃないんだろ？なんでそんなに急ぐんだ」

耳を澄まして臓器の音を聞く

疑問を投げつけた途端アリアの心臓の音が少し変わった

「ママに冤罪がかけられているのよ。864年も」

「864年！？まで、おまえの母さんは人間か？」

「あたりまえじゃない！バカなこと言わないで！」

てことは事実上の死刑か……

「ママに冤罪をかけさせたイ・ウーのやつらを捕まえるために私には力が必要。だからほんとうはそのためパートナーを探していたってわけなの」

イ・ウー！

あの糞野郎が所属している組織！

まさかこんなガキみたいなやつが知ってるとは……！

ってことはこままアリアに付いていけば何か得られるかもしれないのか

これも運命なのかな？

俺は心の中で怒る

そして怒っている自分自身を笑う

「こ、怖いじゃない。そ、その顔やめてお願い」

うん？顔に出てたか

アリアがめっちゃ怖がってる。

止めるのをお願いされるほどひどい顔してたのか

「でも私はあんたに負けた。だからもう奴隷なんて言わないわ」

でもすぐに悲しそうに、ほんとにはパートナーになってほしいけどね。と小さな声で呟くのを俺は聞き逃したりしなかった

「ああ、俺は奴隷にはならない」

「そうよね私の勝手だ」でもな誰もパートナーにならないなんて言

ってないぞ」

「え……?」

「奴隷にはならないって言ったただけだ。それに俺もイ・ウーを追ってるんだ。だから利害は一致する」

「ホント!?」

「本当だ」

「やったー!」

うれしさのあまりアリアは抱きついてきた。それも満面の笑顔でうわ、めちやくちゃカワイイ

なんだか抱きしめたくなるねこれ
しかもクチナシのいい香り

もしかしたら、もしかしたら本当に俺は匂いフェチなのかもしれない
認めたくないけど!

「な、何やってるんですか!」

「「ア、アカリ!?」」

「や、こ、これは違うの!」

「おまえいつから見てた!?」

「ついさっきです。まだかなーって覗いたら、ふ、二人が抱き合ってるんだもん!」

アリアはついにオーバーヒートしてしまった
顔も首筋も真っ赤でリングみたいだ

「優輝先輩やっぱりあなたはヘンタイのままです！アリア先輩帰りますよ！」

そういつて半ば強引にアリアを引きずって帰ってしまった
どーやったら汚名返上できるんでしょうね

第七弾 やっぱそういつ性癖なんですね（後書き）

感想待ってます

第八弾 キンジくんがついにおちました

アカリがアリアを引きずって帰って行ってしまった次の日

「なあキンジ。頼みごとがあるんだけど」

「なんだ？強襲科に戻れって言うんだったらお断りだぞ」

「……いや、そうじゃないんだ。ちょっと理子に会ってきてくれな
いかな？依頼を頼んだんだけど」

「ああ、それならいいぞ。俺もちょうど理子に会いに行くんだ」

「ありがとう。頼むよ」

キンジも理子に用があったようなので結構簡単に了承してくれた
この間のアリアとの試合でナイフとかをパクった奴について調査し
てもらってる
もちろんパクった奴には制裁を加えないといけないけどね

キンジに用を頼んだ俺は今電話をかけている

「もしもし、優輝だ美羽、元気でやってるか？」

「ひさしぶりねミキ様。」

電話の向こうの人物は、茨城 美羽というやつで小さいころからの知り合いだ。ちなみに曾爺さんの舎弟の子孫の末裔。

「それは今の俺じゃない。まあいいけど。頼みごとがあるんだ」

「優輝様ついに私が必要になったの？」

なぜかうれしそうに尋ねてくる
なんでうれしそうなんだ？

「いや、そんなんじゃない。また今度協力してもらうことがあるかもしれないけどね。」

「そ、そう残念……。本題に入りましょ……」

電話越しからでもはっきりと落ち込んだ様子が分かる

「あ、ああ、日本刀を頼みたい、紅鬼（こうき）と藍鬼（あいき）。父さんが持ってたよ
うな奴」

「ええ、つくれるわよ。ちょっと時間かかるかもだけど」

「じゃあ頼んだ。どれぐらいかかる？」

「うーん、総力を挙げて5日ってとこね。それでもかなり早いのよ」

うーん、5日か……そこまで急ぐことじゃないからいいかな、それぐらい

「わかった。代金のほう勝手に落しといてくれればいい。それじゃあまた」

「ま、まって！」

「うん？まだ何かあるの？」

「えっと、あ、あのね暇があつたら一緒に遊びに行かない？なんて……」

暇か……いまはアリアについてのいろいろがあるからな、しばらくは暇になりそうもないけど。まあ、いつか誘ってやるか

「今はちよつと忙しいからまた時間を見つけてみるよ」

「優輝——！帰るわよ——！」

アリアが大声で俺を呼んでいる。その声はどうにも美羽のも届いていたようで……

「ねえ優輝様……あの声だれ？帰るって？どこに帰るの？さっきは忙しいって言ってたでしょ。？ねえ、どういうことなの！？」

うああああ！耳が！

携帯から大声で怒鳴ってきてそのせいで耳がキンキンしている、電話口で騒ぐのはやめてほしいよホントに。ていっかなぜ怒ってるのだろう……

「いや、ホントにいまは忙しいんだって」

「そうね……忙しいのね。それじゃまた優輝様……」

そう言っで一方向的に切られてしまった

これはさっきの比じゃないほどに落ち込んでるな。負のオーラがこちらにまで伝わってきそうだ。後であやまっておこう。

「優輝、あんたどうしたの？早く帰るわよ」

いつの間にかアリアが近づいてきて俺の顔を覗き込んでいたようだ

「はあ……面倒事が増えたよ。まあいいや、じゃあ行こうか」

どうやってあいつを元気にさせようそんなことを考えつつも、俺たちはキンジをどうやって強襲科にいれるか話しながらしなから寮に向かうことにした

キンジ side

「遅い！」

寮に帰った途端にそんなことを言われた
はあ、やっぱりここに来たか
優輝はまだ帰ってきてないのか

「何でここにおまえがいるんだよ」

「あんたが強襲科に入るまでここにいろわよ」

と手鏡を覗き込みながら返事を返してくる
くそ、まったくこいつは

「さすが貴族様。身だしなみにもお気を遣われていらっしやるわけ
だ」

洗面所に入って、イヤミな口調で言い放つ
するとアリアは

「あたしのことを調べたのね？」

となぜかうれしそうに返してくる

「今まで1人も犯罪者を逃したことがないらしいんだってな」

「へえ、そこまで調べてんだ。でもこないだ1人逃したわ」

へえ、逃げ切れたやつもいるんだ。こいつならどこまでも追っかけて行つて捕まえそうな感じなんだけど

「誰を取り逃がしたんだ？」

コップに水を汲み、うがいを始める

「あんたよ」

ぶっ！

水を盛大に吐き出してしまった

「お、俺は犯罪者じゃないぞ！なんでカウントされてんだ！」

「強猿したじゃない！あんなケダモノみたいなマネしといて、しらばつくれるつもり！？このウジ虫！」

「そうだぞ、性犯罪者。またの名を変態一号」

「ゆ、優輝！？おまえいつからいたんだよ！」

ビックリした！いつ帰ってきたんだろう？

「ずっといたぞ。てか白雪さんのときもそうだけど俺っておまえらから認識されないの？」

「とにかく！あんたはあたしのドレイになりなさい！強襲科に戻つてあたしから逃げたあの実力をもう一度見せなさい！」

「あれは、偶然、上手く逃げられたただだ。俺はEランクの、大したことない男なんだよ。はい残念でした。出て行ってくれ」

「ウソね、あんたの入学試験の成績。Sランクだったわ!」

くそ、しらをきれないか

「とにかく、今はムリだ!出ていけ!」

「なにか条件があるのね。言ってみなさいよ。協力するから!」

協力って、そんなことできるわけないだろ!

つい俺はアリアに手伝わせている光景を思い浮かべてしまい顔が赤くなる

「なあ、キンジあきらめろよ。さあ一緒にアリアのパートナーになるうぜ!」

「一緒って何だ!まさかパートナーになったなんて言うんじゃないだろうな!?!」

「そのまさかだよキンジ君。ぼくはアリアのパートナーになったんだよ」

はあ、もうすでにアリアの手は優輝に伸びていたわけか

「わかった、わかったよ……一回だけだぞ」

「一回？」

「そうだ戻ってきてやるよ強襲科に。ただし組むのは一回だけだ。最初に起きた事件を一件だけ一緒に解決してやる」

大したことないってことを見せつけて失望させてやれば離れていくだろう。それに優輝はもうアリアのパートナーなんだし心配はないだろう

「どんなに小さな事件でも一件だぞ」

「いいわ。手抜きしたら風穴だからね」

「ああ。約束する全力でやってやるよ」

通常モードの俺で、な

第八弾 キンジくんがついにおちました（後書き）

茨城 美羽はそのうちに出そうとおもってます

第九弾 心の中では（前書き）

どうもお久しぶりです
いやーか月ぶりですね

第九弾 心の中では

強襲科——通称『明日無き学科』

この学科の卒業率は97・1%

簡単にいえば100人中3人くらいが生きてこの学科を卒業できないわけだ

本当なら俺もこの3%の中の人間で卒業アルバムのはじっこに丸く顔が映っているはずだ

なんて取り留めもないことを考えているうちに浮かない顔のキンジがやってきた

「おうキンジい、お前は絶対帰ってくると信じてたぞ！さあここで1秒でも早く死んでくれ！」

「まだ死んでなかったのか夏海。お前こそ俺よりコンマ1秒でも早く死ね」

「やあ死ねキンジ君死ね元気そうだね死ねだから死ねさつさと死ね」

「お前なんて言ってるかまったくわからん」

「やっときたかキンジ、俺はうれしいぜだから今すぐ死ね」

「俺はうれしくない、お前こそ死んでくれ」

ここでは死ね死ね言うのが挨拶なので連中は必ず死ね、という単語をどこかに織り交ぜてくる

みんな頭がほんのちよつとだけ狂っている。完全におかしいのが1人いたが気にしていると負けだ

そんなキンジをながめている俺だったがキンジが挨拶を終え外に出るようだったのでそれに従って俺も外に出ることにした
外には小さな影が立っていた。いうまでもなくアリアである

「あんた、人気者なんだね。ちよつとビックリしたよ」

「こんな奴らに好かれたくない」

「……人に好かれるっていいことだよ」

キンジの発した言葉にほんの少しだけ悲しくなる

「あんたって人付き合い悪いし、ちよつとネクラ？って感じもするんだけどさ。このみんなは、あんたには……なんていうのかな、一目置いている感じがするんだよね」

たぶん入試の時受験生だけじゃなく潜んでいた教官までも叩き潰してしまつたせいだろう

その時はヒステリアモードだったらしい

「あのさキンジ」

「なんだよ」

「ありがとね」

「なにを今さら」

アリアの小声ながらにしかし心底うれしそうに感謝する声に思わず息がつまった

あんなふうに感謝なんてされたことのない俺にとってはアリアの言葉は欲しくてしょうがないものだった

それをいともたやすく得たキンジに羨望と嫉妬が混じり合った感情が心の底からわきあがる

「あたしなんか、ここでは誰も近寄ってこないからさ。実力差がありすぎて、誰も、合わせられないのよ……まあ、あたしは『アリア』だからそれでもいいんだけど」

「『アリア？』」

なんだか少し違ったイントネーションに聞こえた

「『アリア』って、オペラの『独奏曲』って意味でもあるんだよ。ソロパート。一人ぼっち——どこにいてもそうだった」

どこにいても一人ぼっち……

昔の俺、いや今もそうか

こいつらだって本当のことを知ったら絶対に俺を避けるようになる
今までだってそうだったから……

「それじゃあオペラなんてやめてバンドやろうぜ」

「バンド？」

「ああ、俺がドラム。キンジがベースで、アリアがギターとヴォー
カルな」

アリアはクスクスと笑う

「おもしろいこというじゃない。」

「おもしろいか？」

「ええ」

「そっか」

その笑顔がうれしかった

さっきまで心の中に渦巻いていた感情が消えてなくなるくらい

どうやら俺はまだ懲りていないらしい。優しくされたいんだろっか？
そんなの……されるわけないのに

「ねえ、キンジ。」

「何だよ」

「やっぱりあんたはここにいたほうが生き生きしてる。昨日までの

あんたは、なんだか自分にウソついてるみたいで、どこか苦しそうだった。今のほうが魅力的よ」

「そんなこと……ないっ」

キンジは顔をアリアから背ける。これ以上聞きたくないとでもいうように

「俺たちはゲーセンによつてく。お前は1人で帰れ。ていうかそもそも今日から女子寮だろ。一緒に帰る意味がない」

「バス停までは一緒ですよーだ」

アリアはベーとベロを出して笑う
キンジを強襲科に連れ戻したことがうれしいのだろう表情にモロでている

ばばぬきとかポーカー弱そうだな

「ねえ、ゲーせんって何？」

「ゲームセンターの略だそんなことも知らないのか」

「帰国子女なんだからしょうがないじゃない。んー。じゃあ、あたしも行く。今日は特別に一緒に遊んであげるわ。ご褒美よ」

「いらねえよ。そんなのご褒美じゃなくて罰ゲームだろ」

「そんなこと言うなよキンジ。アリアもつれていって……ってオイ！」

話も聞かずすごい速さでゲーセンにむかう二人
ぎゃあぎゃあ騒ぎながら遠ざかって行ってしまう。そんな二人を茫
然と眺めながら俺はため息をついた

「まったくしょうがない二人だ」

あいつらはまだ俺のことを知らない
だから今だけは笑っていてもいいよね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7720v/>

緋弾のアリア 鬼の子と緋弾

2011年11月13日12時13分発行